

二〇二二（令和四）年度

安居開講にあたって

— 特別講義 —

本年度の安居は、七月十八日から三十一日までの十四日間、開講されます。

この期間中、本年度安居特別論題「感染症と念仏者」について講義が行われるにあたり、講師に概要をご執筆いただきました。

近代真宗者の災禍への取り組みに学ぶ — 感染症対策から仏教主義慈善病院設立まで —

龍谷大学教授 中西直樹



近代以前から、仏教（真宗）者はさまざまな災禍が各地でおこるたび、死

者の葬儀・追悼会を営み、罹災民への救助活動や支援物資の施与を行ってきた

た。また医療機関が未発達であった地方では、僧侶が医師（僧医）を兼ねる場合もしばしば見られた。しかし、それは地域に限定した活動がほとんどであり、仏教宗派（本願寺派）が組織的に関与したケースは少なかつた。

近代に入ると、交通機関が発達して人々の往来が増え、電気・上下水道・ガスなどが整備され、生活の利便性が飛躍的に向上した。ところが、その一方でひとたび大きな災禍に遭遇すると、都市機能が麻痺しライフラインも寸断され、多数の困窮者が生み出されるようになった。また資本主義経済の進展にともない、貧富の格差が拡大して広範囲に生活困窮者が生み出され、大都市にはスラム街が出現してさまざまな社会問題が発生した。

仏教（真宗）は、生老病死という人間の苦の問題を深く見詰め、それを乗り越えていく道を追求めてきた。しかし、近代に入って人々の直面する苦の問題は、社会のひずみからおこる社会

問題と密接な関係をもちながら複雑化し、多様な対策が求められるようになった。

こうした状況に真宗者と仏教宗派（本願寺派）とは、どのように対応してきたのであろうか――。

明治期の真宗者と本願寺派は、明治十年代のコレラの感染拡大への対策を経て、明治二十四年の濃尾大地震への救助活動に取り組み、その経験を契機として、明治三十一年に本山門前に本願寺看護婦養成所を開校させた。さらに明治三十四年には大日本仏教慈善会財団を設立して宗派内の慈善事業の発達を奨励し、明治四十四年には、その支援を受けて本派僧侶（西島覚了）により仏教主義慈善病院「早稲田病院」が東京に設立された。

この講義では、さまざまな災禍に対する真宗者と本願寺派の取り組みの変遷について、特に医療救護事業に焦点をあてて概説する。

明治期、生老病死の問題への総合的

アプローチの方策を追及する真宗者は、医療救護の問題においても、仏教的立場から斬新な知見を示すとともに先進的な事業を展開してきた。しかし、今日の取り組みはやや低調な側面が見受けられる。ここで改めて、明治

期の真宗者と本願寺派の医療救護の取り組みを確認することは、現代日本の直面する諸課題に、真宗者と本願寺派がどのように対応すべきかを考える上でも意味深いことと考える。

■略歴■ なかにしなおき 1961年、三重県生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、京都女子大学事務職員、筑紫女学園大学准教授等を経て、2011年に龍谷大学に着任。現在、龍谷大学教授、本願寺史料研究所委託研究員。専門は、日本近代仏教史。

著書に『仏教と医療・福祉の近代史』（法蔵館、2006）、『仏教海外開教史の研究』（不二出版、2012）、『近代西本願寺を支えた在家信者―評伝松田甚左衛門―』（法蔵館、2017）、『新仏教とは何であったか―近代仏教改革のゆくえ―』（法蔵館、2018）、『明治前期の大谷派教団』（法蔵館、2018）、『近代本願寺論の展開』（三人社、2020）、『真宗女性教化雑誌の諸相』（法蔵館、2021）ほか。